



イングリもんDAY

その男は僕に、「全力をださんかい」と言った。

僕はその人のことを、「師匠」と呼んだ。

師匠は僕より15センチほど背が低く、髪は白髪交じりの短髪で、癖のせいでもみあげとうなじの毛先がくるりとカールしてしまうことを思春期の女の子みたいに気にしていた。

初めて会った時、師匠はよろしくお願いしますと名乗った僕に「お前、なんか特技あるんか？」と訊き、「ありません。」と即答した僕を睨みつけ握手を求めてきた。

体に比べるとずいぶん大きな、温かい手だった。

師匠は小ぶりのがっちりとした体格で、肌は浅黒い。

二重の大きな目は、濁っているくせにギラギラと、強いビームを放つ。

マッチ棒が3本くらい乗りそうな濃いまつ毛と、そのマッチで火をつけたら派手に燃え上がりそうな太い眉を見て、この人は南の方の血が混じっていると確信した。

このとき僕には金が必要だった。

高校を卒業すると同時に家を出て食品会社に就職したが、上司との折り合いがつかず、十二指腸潰瘍を繰り返し、睡眠剤を飲まないで眠れなくなり退職してしまったからだ。

僕には妹がいて、妹は今年の秋に結婚する。

年金暮らしのオヤジと、スーパーのパートで働く母が、妹にいっばしの嫁入り道具を買ってやりたいと切りつめて生活しているのを知っているし、頼るなんて考えは毛頭ない。

少しばかりの貯蓄と鼻くそほどの退職金で何とか数カ月やり過ごしたが、底が見えてきたので再就職するまでのつなぎとして、解体現場で出る廃材の運搬作業のバイトをすることにした。

体力仕事は初めてで自信はなかったが、日当1万円の魅力に負けたのだ。

初日は狭い路地の奥に建つ古い二階建て一軒家の、リフォームのための内装解体だった。師匠やほかの人たちへの挨拶をすませ、社長の指示を仰ぐ。

社長といっても僕より幾つか年上の、顔は福山雅治似でしゅっとした男前のくせに、凶器にしか見えないシルバーのネックレスをしたやたらガタイの良い人で、重低音の声色で北斗の拳のケンシロウみたいなオーラを放っていた。この人にはいろんな意味で、かなわないだろうな、と思った。

とにかく今日は邪魔にならないよう、玄関付近に集められた廃材を、20メートル向こうに止めたトラックの荷台に運ぶという作業を命じられる。

渡された新品の軍手をはめ、マスクをつける。作業はすでに始まっており、胃に響く轟音と共に粉じんが舞い上がる。

家の奥で誰かが誰かに大声で指示を出す。

玄関の前でぼうっと立つ僕に、師匠は突然叫んだ。

「ワレ何しとんじゃい！」

僕は何もしていない。何にもしていないのに何をしているのかと尋ねられても答えようがない。

「手伝わんかい！」

どうしていいかわからずに、あわあわと変なステップを踏む僕に師匠がカモンと手招きする。

「言われたことしかでけへんのはチェリーボーイゆうんや、全力を出さんかい！」

師匠が何か違和感を感じる一言を放ち、引き寄せられるように中に入ろうとした僕にケンシロウ社長が「くるんじゃねえ」と怒鳴った。

よくみると室外にいる僕以外、みんなヘルメットをしている。

師匠は無茶を言う人なんだな、と思った。

午前の作業が終わり、現場近くのコンビニで買ったおにぎりの包装を①、②、③とパッケージに書いてある指示どおり破り、現場近くの歩道のガードレールにケツを乗せかぶりついていたら師匠が現れた。

師匠はダイエットコーラの缶を片手に持ち、僕と同じようにケツを乗せようと試みるが無理で、僕の足をじろじろと見「なんじゃい」と小さく言い、となりに立った。

「お前、アレ好きか？」

師匠と【アレ】で通じる共通の何かをしたとすれば、解体作業だ。

でも一応確認することにした。

「アレ、といますと？」

僕が訊くと、師匠は少年みたいに笑って「イングリモングリや」と言った。

「イングリモングリ？」

イングリモングリが、自慰行為を表しているのはすぐにわかった。

師匠が歯を食いしばり、右手で作った輪っかを上下に激しく動かしたからだ。

「あ、ちょっと……」僕は慌てて師匠の手をつかみ、周りを見渡した。誰にも見られていないようだ。なんて人だ。

「どうや？好きか？」

僕はこの質問に、答えなければいけないのだろうか。

出会ってまだ数時間の、南の国のこの人に、自慰行為が好きです。と告白せねばならない 理由がどうしたって見つかる訳がない。

「好きやろ？どや？え？」

自分でも顔が赤くなっているのがわかる。そして僕が答えるまで、この男があきらめないことも。

僕は一つ大きく息を吸い、ガードレールから降りる。

なるべく師匠に顔を寄せるために腰を折り、目を合わせずに答える。

「好きか嫌いかって言われれば…そりゃ好きですよ。でもやっぱり一人でするよりは……」

「がははは！そやろ、そやと思ったわ！好きそうな顔しとる！俺も好きや。大好きやさかい、仲ようしよう。俺のことを、師匠と呼べ」

師匠はそれから休憩が終わるまでの40分間、自慰行為について語りつくした。
こんなに熱く自慰行為を語る人を初めて見た。

初めは軽蔑混じりだった僕も、終わるころにはこの講義をもっと受けたい、とさえ思っていた。
師匠が最もお勧めする自慰行為の小道具ランキング一位は、板こんにゃくだった。

板こんにゃくイングリモングリのレシピはこうだ。

まずは板こんにゃくを水で軽く洗う。

次に長方形の板こんにゃくの、長さが短い方の辺の中央へ、まな板と平行にナイフを突き刺し、自分のモノのマックスサイズより少し小さめの直径になるよう穴を開ける。

フルーツ用のペティナイフがベストだが、無ければ物差しを代用しても良い。

あまり大きく切り込むと、こすっている間に裂けてしまい、すべてが無駄になるので気をつけたい。

そしてここからが大事なところ。

次にレンジで温めるのだが、ラップをせずにレンジに入れると、火花が散って焦げ付くことがあるらしいので、必ずラップをふんわりのせるように。

師匠のお気に入りにはレンジを使用せず、60度の湯で2分間温め、携帯灰皿のように板こんにゃくに入れた切り口をパクッと開き、そこへさっと冷水をかけ流す。というものだった。

最後に注意点として、手で触ったよりもモノに触れた時熱く感じるので注意するように、とのこと。

僕は初日の仕事を終え、家路につく。

疲労で足と腕が鉛のように重い。全身の秘孔を突かれたみたいにダメージを受けている。

お前はもう死んでいる、と言ってほしい。楽になりたい。

ずるずると、ゾンビみたいに進む僕の目に、赤と緑の縁にハトがあしらわれたスーパーの看板が目に入る。

そうだ、板こんにゃく。

迷うはずがない。

この疲れを吹き飛ばせるのは、イングリモングリしかない。

師匠に教わったレシピを、試すため材料を手に入れなければならない。僕は店内に入る。

食品会社での経験から、こんにゃくの売り場はすぐに見当がつく。

豆腐などと一緒に並べられた板こんにゃくが、カモンと、手招きする。

陳列に並ぶ板こんにゃくの中で、もっとも大きなサイズを手にする。くせで裏の表示を見る。成分の欄に、こんにゃく粉（国産）、海藻粉末、貝殻焼成カルシウム（こんにゃく用凝固剤）と書いてある。もう一度表を見ると「あく抜き済み」の文字。よし、これだ。

僕はあく抜き済みの板こんにゃくと、鮭の弁当と、乳酸菌飲料のマミーをかごに入れ、一番短い列のレジに並ぶ。独特のイントネーションで値段を発音しながらバーコードを読み込ませるレジのおばさんも、この板こんにゃくが自慰行為に使われるなど、よもや思っていないだろう。板こんにゃくの買ったスーパーの袋を手にとると、幾分か体が軽くなったように感じた。

玄関を開け、靴を脱ぐ。

僕は上着も脱がずに何よりもまず、AV女優の中でも一番お気に入りのYURIA(ゆりあ)ちゃんの最新作、「処女喪失」というDVDをデッキに挿入した。

そして片手鍋に水を溜め、火にかける。

レンジで温めると、部分によって温度にムラが出来そうだ。やはりここは、師匠のいうスペシャルレシピでいくしかないだろう。

上着を脱ぎ、手を洗い、まだ何の変化もない鍋の中を見ながら、鮭弁当のラップの脇に、ペティナイフで切り込みを入れ、ラップを綺麗にめくる。

お袋、ありがとう。

僕は今、ここにフルーツ用のペティナイフがあることを初めて心の底から感謝した。鮭弁当の半分も食べないうちに、板こんにゃくを袋から取り出し、手に持つ。

板こんにゃくが、不思議と愛おしく思える。その柔らかな裸体を水道水で洗い流し、軽く水気を拭きまな板に載せる。一度深呼吸しよう。ここからは、緻密な作業が要求される。

僕は右手に持った包丁の歯先を、そーっと、こんにゃくに差し込む。ゆっくりと、中間まで入れ、一つの疑問が浮かぶ。

貫通させていいのか？

しかし師匠は、「温度と形がバッチシ決まれば、時にそれはオナゴ以上の感触」と豪語していた。となるとやっぱり本物に忠実に突き当たりが合ったほうが良い。

僕は奥に3センチほど未開拓部分を残し、包丁を引き抜く。かなり良いサイズになったように思えた。

片手鍋の中の湯に、指を入れる。60度よりは低い感じだが、もう待てない。僕はコンニャクちゃんを優しく沈める。そして小走りでテレビをつけに行き、DVDを再生する。
おめめくりくりのゆりあちゃんが、制服姿で現れた。

僕はゆりあちゃんとコンニャクちゃんを交互に見る。

白い肌のゆりあちゃん。

.....灰色で黒い点々があるこんにゃくちゃん。

ピンクの口紅のゆりあちゃん。

.....灰色の唇のコンニャクちゃん。

もちもち肌のゆりあちゃん。

.....ぷりんぷりんのコンニャクちゃん。

.....もういいだろう。

僕は湯を捨てた鍋の中のコンニャクちゃんを素手でつかむ。熱い！慌てて離す。ボトリと流しに落ちる。慌ててつかむ。やっぱり熱い！蛇口をひねり、水を出す。さっき入れた切り込みをパクッと開き、未開拓の内部に水を流し込む。細く息を吐きながら、呼吸を整える。

画面では部屋に連れ込まれたゆりあちゃんが、上目づかいで僕を見ていた。

程よく人肌になったコンニャクちゃんを左手に持ち、右手だけでジーパンを脱ぐ。慌てるな。自分に言い聞かす。パンツも脱ぎ、座布団を二枚並べ、その上に横たわり、ティッシュの箱を手元に寄せ、人魚のポーズになる。ワクワクする。

とうとうゆりあちゃんのセーラー服が乱れ、脱がされる。白い下着の上から触られて、ゆりあちゃんが艶めかしい声を出す。

僕のモノがむくむくと起き上る。ようし、良いぞ。

コンニャクちゃんの口を開く。

あれ？

まだ半分しか元気になっていない僕のモノが、丁度入る大きさしかない。

謙遜しすぎたか。

僕は流しを見る。

今またペティナイフを取りに立ち上がるのはシラけてしまいそうなので避けたい。

下着はすべて脱がされて、全裸のゆりあちゃんが僕を待っている。

仕方ない。僕はコンニャクちゃんの挿入口に、指を入れる。

少しだけ力を加え、横に裂く。いやん。

もうちょっと、あとちょっとだ。やだ、やめて。

あと少し……ブリリン。

「あああああああ！！」

指で愛撫しただけのコンニャクちゃんが、裂けた！

なんてことだ！

そんな馬鹿な！

やっぱり面倒でも、ナイフを取りにいけばよかった！いや、そもそもなぜ予備を買っておかなかったんだ！一枚98円だったのに！たったの98円だったのに！

画面には、頬がピンクに染まったゆりあちゃんの潤んだ瞳がアップで映る。

下半身裸で頭を抱える僕にむかって、ゆりあちゃんが「やぶれちゃう！」と叫んだ。

日の現場は、立派な古い一軒家の解体だった。ケンシロウ社長がヘルメットを僕に差出し、暴走族のカラスマスクみたいな形の白いマスクと小さなバールをくれた。キッチンとリビングの間の壁を、とにかく破れ、という指示。僕はフラストレーションがたまっていたので、ここぞとばかりに壁を打ち砕いた。年季の入った板張りの壁は、簡単に剥がれ落ちた。師匠はというと、昨日の僕がやっていた作業をしているだけだった。僕は、師匠より出世してしまったようだ。

昼休みになり、コンビニの駐車場のフェンスにもたれ、またおにぎりの包装を丁寧にはがし食べていると、どうしてここがわかったのか師匠がやってきて、当然のように僕の横に来てフェンスにもたれ、稲荷寿司と巻き寿司が入った弁当のラップを乱暴に剥がし、稲荷寿司の一つを口にほり込んだ。

「師匠」

「なんや」

「師匠は市販のもので間に合うんですか？」

「なにがや」

「板こんにゃく」

「……」

師匠は大きい二重の目をより一層大きく開き、稲荷寿司を頬張った頬がもっこりと膨らんでいて、ハヒ、ハヒ、と米粒の間から息を漏らす。

米と揚げをかみ砕き、飲み込んで師匠が、お前、お前、とつぶやく。

「どうしたんですか？」

「お前、ほんまにやったんか？」

いや、まだですけど。

「お前、ほな昨日はイングリモンデイか！」

え？いや、だから失敗したんですけど。

「どやった！？どやった！？え？気持ちよかったか！？」

師匠は興奮しながら僕に矢継ぎ早に訊いてくる。

僕はうっとうしくなり、もう一つのおにぎりを袋から取り出した。すると師匠が、僕のおにぎりを取り上げ、包装を③から引きはがし、海苔と白飯の位置がずれ、①を無理やり引っ張り、中のシーチキンが飛び出た内臓みたいになって、おにぎりと言うよりもはや『米と海苔の握りつぶし、シーチキン添え』みたいな具合になって、僕は泣きそうになり師匠から、元おにぎりを取り上げる。

しつこく質問を浴びせる師匠を無視してシーチキンをすすっていたら、僕のポケットの携帯の

バイブがブー、ブー、と震える。

僕は左手に米の塊を持ち、右手で携帯を取り出し、携帯のウィンドウをスライドさせる。メールだ。かなり前のコンパで、メールアドレスだけ聞いておいた、受付嬢の女の子からだった。僕は画面をスクロールし、文面を読む。

[お元気ですか？あれからだいぶ経ってしまい、メールするのにかなり迷ったんですが(困ってる顔文字)、また会いたいな、と思って勇気を出しました(ハート。チカチカ)よかったら、今度.....]

僕の視界から携帯が突然消える。何も持たない右手が目に入る。え？なんで？

「俺はそういうのは大っ嫌いや」

師匠がそう言って、フェンスの向こうのどぶ川に向かって何か投げる。

ブルーのメタリックの塊が、綺麗な放物線を描き、太陽光を反射させてキラン、とかっこよく光り、どぶ川に落ちる。ポチャン、と不快な音がし、深緑の流れの無いどぶ川に小さな波紋が浮かぶ。

「昔はこんなもんなかったんや。こんなもんに頼るさかい、おかしい人間が増えるんや。人の話も聞かんと、携帯をいじる奴は大嫌いや！」

僕はやっと、さっきの塊が自分の携帯であることを把握する。

僕はフェンスにしがみつく。どぶ川の、ビニールや、タイヤや、藻や、ヘドロが、僕に知らんぷりする。

嘘、ウソ！うそでしょ！？ええええ？ああ.....神様仏様！僕の、僕の大事な携帯が！まさかまさか！時間よ、もどれ！えええええ！？なんでなんで！これは、犯罪じゃないのか？立派な器物損壊罪だ。ケーサツ、助けて！！泣きそうだ。いや、おしっこが漏れそうだ。キャー。

「.....あいつめー！！」

師匠はもうとっくに駐車場を出るところで、小さな背中に悪魔のしっぽが見えた。

現場に戻り、魂を抜かれたみたいになった僕は、無心で壁を破る。物心ついてからずっと、携帯は僕の体の一部だったから、携帯が手元に無いなんて信じられない。正直これからどう生きていけばいいのか、わからなくなった。

仕事が終わりに、社長のもとに駆け寄る。

師匠に携帯を捨てられたことをチクリ、社長の電話番号を教えてくださいとお願いする。

「なんで捨てられたんだ？」社長が電話番号を書いたメモを差し出しながら言う。

「僕はメール見てただけです」社長、あいつの秘孔をついて下さい。

「おっさんと一緒にいる時にか？」

「となりでメシ食ってただけです」

「となりにおっさんがいるのにメール見たのか？」

「はい」

「そりゃあ、おめえが悪いわ」アベシ。

「お前、おっさんにおちょくられてんのか？」ええ、まあ。

「お前まさか、コンニャクでシコったんじゃないだろうな？」ヒ、ヒデブ。

「これで新しいの買え」

社長はポケットからくしゃくしゃの一万円札を出す。

社長に後光が射していた。ありがたや。

僕はその足で携帯ショップに行き、番号を変えずに新しい携帯を手に入れ、カップラーメンを買って帰る。

新しい携帯に、社長の番号を入れる。それから実家の番号。

.....あれ？

他に必要な番号が思い浮かばない。地元の仲の良い奴からは、そのうち電話があるだろう。メールも来た時に登録するとして。

なあんだ、なんだか大したことじゃなかったな。

思えば受付嬢の女の子からのメールも、消えてしまえばそれまでで、連絡の手段が途絶えたからと言って、うろたえるような相手でもなかった。

僕はカップラーメンをすすりながら、なんだか身辺整理が出来たようですっきりした、と思った。

次の日も昨日と同じ現場で、でも今日はヘルメットは渡されず、また玄関先に集めた廃材をトラックに運ぶ作業を命じられた。もちろん師匠も一緒だ。

僕は師匠を無視して、黙々と作業をこなす。

新しい携帯は、死んでも師匠の前では出さない、と心に固く誓う。

トラックと現場を往復していると、何度か師匠と鉢合わせする。

「お前、昨日もイングリモンデイか？」

「お前、今日もグリグリえぶりデイか？」

「お前、明日もレロレロステファニーか？」

と、いろいろと名称を変えるものの、そのいずれもが自慰行為を表していることはもう、顔を見なくてもわかった。

昼休憩になり、僕は逃げるように現場を離れ、少し歩いたところにあった団地の一角の公園の、パンダの形の石像に腰かけ、おにぎりを食べる。

「おい」と聞こえて鳥肌が立つ。

振り返ると疫病神が、嬉しそうに手を振りながらこちらに歩み寄っていた。

「お前の考えてることはなんでもわかる」と師匠は言った。

僕は師匠に背中を向け、パンダにまたがったままおにぎりを食べた。師匠は黙って、となりのゾウの石像に腰かけて、何かを食べていた。

なにも話さないままおにぎり二つと、ロシアという何にも入ってないただデカイだけのパンを食べ、パンダの上で空を見上げていると、師匠が「おい」と僕を呼ぶ。

僕は無視する。

「おい」ともう一度呼ぶ。

仕方なく振り向くと、師匠がタバコのボックスの箱を差し出している。

四本しか入っていないくて、師匠がほれ、ほれ、と差し出すたびにタバコが箱の中でコロコロと場所を変える。

「いりませんよ」僕は言う。

「ええから一本引け」師匠が言う。

僕は四本のうち一本を、仕方なく引いた。

「お前それ、よう覚えろ」

は？

「ええか、俺に見えへんように、そのタバコをよう覚えろ」

師匠はまるで、一枚のトランプを引かせ、そのナンバーとマークを覚えろ、とでも言うようにタバコを覚えろという。

四本ともすべて同じで、この一本にだけ特徴があるはずがないのに。

タバコには、one と書いていて、グレーのラインが一本入っている。

「ええか？ 覚えたか？」

師匠は言い、僕のタバコを奪おうとする。

「や、ちょっと、ちょっと待って下さいよ。ルールを教えてくれなきゃ」

僕が言うと、ええから貸せ、と僕の手からタバコを奪う。

僕が拗ねると師匠は背中を向け、隠しながらなにかごそそとあやしく動く。

僕はパンダの上でそれを待ち、師匠はゾウの上で小細工する。

「ええぞ」

師匠が自慢げに箱を突きだす。なんにも変らない。ただ四本が、さっきと同じように歯抜けで箱におさまっているだけだ。

「どれや」師匠が言う。

「何がですか」僕が訊く。

「お前の選んだ奴はどれや、と訊いとるんや。めんどくさいやっちゃん」

面倒臭いのはどっちだ。

僕は適当に、一番右はじの一本を指さす。

「ほんまにこれか？」

言われて迷う。やっぱり右から二番目……いや、一番左？

「チャンスは一回やぞ」師匠は言い、ベロベロベロ……と不気味なドラムロールを歌う。

「これ！」僕は元気よく一番左のタバコを引き抜く。

「ハズレー！！」師匠が大声で言う。

師匠は高らかに笑い、僕は引き抜いた一本のただのタバコを見つめる。

「なんすか、これ」僕は腹が立ち、師匠を睨みつける。

「だからお前はあかんのや。自分を信じろ！あほやのう。お前が選んだやつはこのチチクリタバコじゃ」

師匠は言い、箱に入った残りの三本を一気に引き抜く。

見ると一本だけ魚肉ソーセージの端みたいに、先がこより状にねじって閉じられている。

それは僕が、初めに指さした、一番右はじに収まっていたものだ。

師匠は僕が持っている普通のタバコを取り上げ、代わりに先がねじられているチチクリタバコを渡してくる。

「残念賞や」と師匠は言う。

師匠がライターを差し出すので、僕は久しぶりにタバコをくわえる。

「ん……なんかこれ、フィルターが湿ってるんですけど」僕が言うと、師匠はライターを早く貸せとジャスチャーしながら「先っちょねじる時、俺がくわえたからな」と言う。

一瞬オエーっとなるが、ライターをせかされ仕方なく火をつける。こより状にねじられたタバコの先には、なかなか火がつかなかった。

次の日現場に行くと、師匠はいなかった。

僕は特に気に留めるでもなく、仕事を全うする。

この現場は今日で最後らしい。師匠抜きでも、何ら支障なく仕事が済んだ。

そして次の日、新しい現場に行った。

重機が入られない狭い路地に囲まれた古い一軒家は、更地にするので全壊するらしい。社長の気合がいつもと違うので、僕はそれにならって、言われた作業に全力で取り組んだ。

二週間近くかけて解体し、今日でこの現場は最後、という日、警察の人が来た。

制服の警察ではなく、テレビでしか見たことのない、刑事だ。

刑事と会話する社長は眉をしかめ、いつ北斗神拳を出すかとヒヤヒヤするほどの剣幕だ。

刑事の一人が僕にも話が訊きたいと言う。

僕は緊張しながら承諾する。

「ヤマダオサムさんをご存じですか？」知りません。

「先日までこちらの会社でお仕事されていた、ヤマダオサムさんですよ」師匠？

「何か自分の身の上話などしていましたか？」していません。

「では、何か気になるようなこととお話されてましたか？」イングリモングリですか？

刑事さんはいくつか質問したあと、こりゃだめだ的な表情を僕に投げつけ「ありがとうございました、お手数お掛けしてすいません」としめた。

師匠が僕の携帯を捨てたことは、言わなかった。

刑事が去り、現場の後片付けをしながら社長に、師匠どうかしたんですか、と訊いた。

社長は重たい工具をトラックの荷台に積みながら話し始める。師匠は何かで失敗し、大きな借金を作り、嫁と子供に逃げられここで働いていた。先日突然仕事にこなくなり、おかしいとは思っていたが刑事が言うには、師匠の家には家財道具など全てが残ったままで、師匠は行方不明だという。借金をしている相手が相手なだけに、何か事件に巻き込まれた可能性があるという。刑事が言った、と社長は早口で説明してくれた。

「師匠、大丈夫ですかねえ」と僕は訊く。

「心配するな、責任は俺が持つ」と社長が言う。

それで僕はケンシロウが、「安心しろ、秘孔ははずしてある」と言った時のような少しの安心感を覚えた。

僕はその約一ヶ月後、業務用のスーパーに商品を卸す会社に就職が決まり、ケンシロウ社長の元を去った。これで堂々と妹の結婚式に出席できる。

就職した会社の社員は何にも面白いことを言わない、真面目な人ばかりだったが、前の会社みたいに高圧的な上司もいないし、自慰行為を熱く語る変なおじさんもいない。なんでもない普通の日々が、穏やかに過ぎていく。

入社から二か月がたち、一般向けにネットで食材を販売するらしく、そのチームの一員として配属された。業務用の販売店でしか手に入らない商品の中でも一般受けしそうな物を選び、会議にかけ、通った物だけ販売する。

安くて量のある乾物や、日持ちのするレトルトなどが人気だった。

部長が何か他の流れが欲しいと言い、僕は取引先の食品メーカーの資料に目を通す。

ふと、コンニャクのページで手が止まる。

そこには『業務用特大板こんにゃく』が載っていた。

僕は飛び上りそうだった。

「これだ！」と声を出し、資料の写真にかじりついて、灰色で黒いぶつぶつがある、艶々と色っぽく光る裸体のコンニャクちゃんを舐めるように見た。

「特大サイズ特集」と銘打って、僕はあらゆるものの特大サイズをかき集めた。
明太子、カニ、ホタテ、いちご、それからせんべい、ビン詰マヨネーズ、板こんにゃく。
課長に板こんにゃくは余分じゃないか、と言われたが「まあ、見てて下さいよ」と自信満々に語る僕の押しに負けてOKを出してくれた。
余分なもんか。板こんにゃくがメインだというのに。

しばらくして、メーカーからそれぞれの商品のサンプルが送られてくる。
僕は発泡スチロールの箱の中から取り出した、特大サイズの板こんにゃくに歓声を上げそうになる。
課長や部長のチェックが済み、行き場を失った食品が箱ごと空いているデスクに置き去りになる。
これは僕が担当した仕事だから、すべて自分でチェックする義務があると僕は雄弁に語り、いちごは全部女子社員にプレゼントして他の余った商品を持ち帰ることに成功する。
その中に特大の板こんにゃくが3枚あった。

これで失敗しても大丈夫だ。予備がある。
待ちに待った特大板こんにゃくを手に入れ、うほほーい、と心の中でスキップしながら家に帰る。

玄関を上がり、かばんを置いてジャケットを脱ぐ。キッチンに行き片手鍋に水を入れる。
これじゃ小さい、と思い片手鍋をやめ両手鍋に水をくむ。
鍋を火にかけ換気扇を回し、洗面所で手を洗う。手早くジャージに着替え、ゆりあちゃんの『処女喪失』をDVDデッキに挿入する。

持ち帰った板こんにゃくを手取る。ずしりと重たいダイナマイトボディ。

袋をあけ、まな板に載せる。優に市販のコンニャクの三倍はある。

ペティナイフを手を持つ。だけど僕はひらめく。

より本物に近づけるためには、内部はきれいな断面ではなく、もっとイビツでボコボコしている方が良いに決まってる。

キッチンをぐるりと見渡して、水屋の引き出しを開けスプーンを一本取り出す。

それは僕が実家から、一本だけ持ってきた先のとがった平たい、いちご用のスプーンだった。

スプーンを持ち、わなわなする。

僕は開拓者だ。

コンニャクの短い方の辺に、スプーンで切り込みを入れる。コンニャクが破れてしまわないよう丁寧に、かつダイナミックに掘り進む。奥に少し余裕を残し、引き抜く。

スプーンを置いて、秘密の花園に喜びで震える指を挿入する。その手触りに、鳥肌が立つ。

鍋の中の湯にふつふつと水泡が立つ。

ダイナマイトセクシーボディのコンニャク嬢をそっと投入する。すぐに火を止め二分待つ。

これは、絶対気持ちいいはずだ。気持ちいいに決まってる。

なぜ師匠はこのことに気がつかなかったんだろう。イビツが快樂だということに。

それにこんなに特大の板こんにゃくは、きっと見たこと無いはずだ。

師匠にこのことを話せばきっと、大きな目を一層見開いて、鼻をふくらませて興奮しただろう。

「気持ちよかったか？どや？どや？」としつこく問いただすだろう。

「お前なかなかやるやんけ」と、喜んでくれたかもしれない。「成長しよったのう」と、褒めてくれたかも。

僕はにやにやしながら、DVDの再生ボタンを押しに行く。

鍋の中の湯をシンクに捨てる。

ボコン、と音がしてシンクいっぱい湯気が立ち、目の前が真っ白になる。

.....師匠は無事だろうか。

湯を切った鍋の中に水を注ぐ。

水をコンニャク嬢にまんべんなくかけ、荒熱がとれた所で手に持ち、切り込みを入れた部分に水を注ぐ。

特大のコンニャク嬢は、人肌に温まり、僕を迎える準備が出来る。

左手にコンニャクを持ち、テレビの前に行き、座布団を二枚並べ、ティッシュを手元に寄せ、右手でジャージのズボンとパンツを同時に脱ぎ、人魚のポーズでテレビを見る。

制服姿のゆりあちゃんが、僕に笑いかける。

.....ニッカポッカ姿の師匠が、僕に笑いかける。

ゆりあちゃんが、部屋に連れ込まれそうになって怒る。

.....師匠が、携帯をいじる僕を見て怒る。

ゆりあちゃんが制服を脱がされ、諦めたような表情ではにかむ。

.....師匠が「残念賞や」と言い、寂しそうな顔をする。

とうとうゆりあちゃんが、「やぶれちゃう」と叫んで男にモノを挿入されても、僕のモノは一向に勃たない。

「すごい、すごい、こんなのはじめて、やあん、はあ、はあ」とゆりあちゃんが喘ぐエロDVDが流れる部屋で、僕は下半身裸のまましなびた自分のモノを、バカみたいに特大の板こんにゃくで、ヒタ、ヒタ、と叩きながら、師匠のことを考えた。